

地域の底力

北海道上川郡東川町

# 「写真の町」宣言から 歩んだ三〇年の歳月が 北海道東川町の 文化と人の心を育てた

写真の文化を町に根付かせる。  
道なき道に行く試みはやがて、小さな町を豊かに培った。  
そして今、さらなる道が切り拓かれ、  
未来への種が蒔かれている。

取材・文 山内史子  
写真 野瀬勝一

北海道東川町に位置する旭岳は、日本最大の国立公園である大雪山国立公園の象徴的存在。その登山は東川町の山麓駅からロープウェイを利用しての移動となる。写真の「鏡池」周辺ほか、気軽なトレッキングも楽しめるエリアもある。



1985年の条例化以来役場の建物を飾る「写真の町宣言」。30年の実績を重ねた2014年、写真に関してはもはや東京を上回るとの思いをこめた「写真文化首都」宣言が松岡市郎町長によって加えられた。

### 三〇年の歳月を経て 根付いた「写真の町」

北海道上天川郡東川町は、道内のほぼ中心部に位置する人口約八〇〇〇人の自治体。旭川市の中心部からは約一五キロ、移動の拠点となる旭川空港からは約五キロの距離にある。

産業の要は、米づくりをはじめとする農業と木工業。米は「東川米」のブランドで注目されつつあり、全国的にも人気が高い「旭川家具」は、約三割がこの町で生産されているが、町の名に覚えのある方はさほど多くはないだろう。

とはいえ、そうとは気付かず旅している可能性はある。大雪山連峰の主峰であり道内の最高峰、標高二二九一メートルの旭岳を有し

写真文化首都創生課の西原義弘氏と宮崎アカネ氏。西原氏は町の事業の一環として、観光の宝である大雪山国立公園に関するエピソードをまとめた「大雪山」（共著：清水敏一氏、新評論刊）を執筆した。



ているのだ。麓の旭岳温泉、天人峡温泉を含め、町を訪れる観光客は年間一〇〇万人を数える。

さらには写真の世界において、実は東川町は国内外で広く知られる存在だ。発端は一九八五年六月一日、「写真の町」を宣言して条例化したことに遡るといふ。その経緯を知る副町長の合田博氏が、かつてを振り返った。

「二村一品運動が盛んな時代でしたが、全町民が関われる町づくりのために、物ではなくて文化

が必要だというのが、当時町長を務めていた中川音治氏の考え。旭岳を含む大雪山国立公園や、日本の滝百選にも選ばれた『羽衣の滝』がある東川町は、日本一の被写体になれる。そんな思いから『写真の町』を宣言したんです」

しかしながら、著名な写真家の出身地でもなく、カメラ産業と町が関わっていた過去もなく、という状況で周囲は戸惑った。

「何らかの形で町をアピールし、観光客を増やすのが狙いだったと今はわかります。でも、突然に写真の町と言われたあときは、われわれ職員も町民も、簡単には理解できなかったですね（笑）。バブル期で、どこの行政もハードに力を入れていた頃ですし」

写真映りの良い町づくり、人づ

くり、物づくりを、とのキャッチフレーズのもとで行われたのは、写真界で活躍する人に東川賞を贈る「東川町国際写真フェスティバル」だ。回数を経て、知名度と権威は次第に高まる。一方で、芸術性に優れた作品が必ずしも町民に親しみをもたらずわけではない。日常と乖離したイベントには、否定的な意見も聞こえるようになる。

転機が訪れたのは、宣言から一〇年目の山田孝夫前町長の時代。全国一の高校写真部を選ぶ「写真甲子園」がスタートしたことによる。三人ひと組のチーム制。各地方の初戦を勝ち抜いた高校生が東川町に集まり、町内での撮影とプレゼンテーションで競い合う。

「しくみがわかりやすかった上、撮影に対する協力やホームステイ、



「観光は光を見ると書く。景観だけではなく、人も気持ちも、輝くものすべてが観光になるというのが、中川音治元町長の口癖でした」と語る合田博副町長。



地方戦を勝ち抜いた代表校の生徒たちが本戦で東川町を訪れ、景色や人々を撮影する「写真甲子園」。技術にも増してチームワークが求められる分、そこから生まれる葛藤や逡巡が参加者の心を育み、熱い記憶を残す。  
(写真提供：東川町役場)



炊き出しなど、いろいろな形で町民と参加者との交流する場ができたんです」

参加した生徒への応援、そしてかつて自分の先祖が暮らしていた故郷の高校への応援を通して、町の人たちの思い入れがそれぞれに深まるなか、「写真の町」に対する理解も高まってきた。同時に「写真映りの良い町づくり」も、自然の住宅から店の看板、公共施設まで、環境美化に取り組み意識が、町民、職員の間で根付いていく。

## 写真を介して次第に育まれた町や人の心

歳月を経て、今や東川町は写真部に所属する高校生の憧れの場所になった。写真の町課課長の窪田昭仁氏によれば、第一回に約一六〇校だった応募校数が、第二二回目の今年は五一四校まで増え、七〇〇余名が地区ブロック大会に訪れたという。

「生徒だけではなく、父兄や関係者まで広く東川町に愛着を持っていただけという意味で、未来への種蒔きができていっているのかな。美しい景観はもちろん、東川町の人たちに会いたいという気持ちが生まれるのも、観光資源なのだと思います」

毎年、生徒たちが町内で撮影する景色が当たり前となるなか、町の人々にもいつしか変化が生じた。「うちの町の皆さんは、カメラを向けられると『いいよ』って。撮られることに慣れてきたんですね」窪田氏の話を聞き、なるほどと膝を打った。東川町を訪れて早々、老若男女すれ違ふ人々が必ず、「こんにちは」と声をかけてくれるの

に気づき、驚きながらも嬉しく思っていたのだ。撮影を介して、コミュニケーションの基盤、すなわち「人づくり」も構築されているのを実感した。

「写真の町」が浸透するにつれ、写真家やイベントに関わった人が移住するケースも見られるように。そのひとりが、写真甲子園の本戦で町に滞在した吉里演子氏だ。大学時代も毎年ボランティアのスタッフとして東川町への旅を重ねた後、「心のふるさと」というテーマの卒業制作で再び町を訪れる。「東川町ってどんな町ですか？」そう尋ねながら、町の皆さんを撮影していたんです。一言目にはこ

東川町散策中に目に留まるのは、素朴でユニークな木製の看板の数々。写真の町にふさわしい、思わずシャッターを押ししたくなる温もりある景観だ。



こは田舎だし何も無い町、という答えが返ってきたのですが……」それだけでは終わらない会話を、吉里氏の胸に深く刻まれた。「天気の良い日の山はすごくきれい、お水がおいしい、お米がうまい。ひとりひとりが、自分の言葉で町の良さを表現する。とても印象的

東川町文化ギャラリー館長および写真の町課課長を務める窪田昭仁氏と、同ギャラリー学芸員の吉里演子氏。ギャラリーでは「写真の町東川賞」の作品展示からワークショップまで多彩なイベントが行われる。





上/東川町の役場で出生届や婚姻届を提出すると、フレームにおさめた書類の写しが記念品として贈られる。よそにはないサービスゆえ、遠路はるばるこの町を訪れ、入籍するカップルもいるとか。

(写真提供: 東川町役場)

下/株主として町に投資した人は、一棟貸しの「小西音楽堂」ほか多様な宿泊施設を優待で利用できる。

「交流人口が増加すれば、消費が生まれる。地場の消費の純増につながる」と話す松岡市郎町長。前例がない、予算がない、ほかの町ではやっていない、という理由だけでは新たな提案を却下しない、松岡氏の前向きな姿勢は役場全体の根幹になっている。



「東川町の人にはまった」と笑う吉里氏は現在、「東川町文化ギャラリー」の学芸員を務めている。

**町を思う人を増やす 独自の株主制度**

「写真の町」宣言から三〇年、行

政サイドでは現在、どのような取り組みが行われているのだろうか。松岡市郎町長からは、町に婚姻届を出した夫婦には立派な額装の婚姻届を贈呈するなどの様々なお話を伺ったが、そのなかでも興味深かったのは、一口一〇〇〇円から町に投資ができる株主制度だ。

一般的には自治体存立には一人が必要だといわれるが、〇三年町長に就任した当時の町の人口は七五〇〇人程度だった。

「二万人に満たなければ強制合併もあり得るなか、定住人口八〇〇〇人、応援人口二〇〇〇人、合わせて二万人を目標としました。その応援人口に該当するのが、株主の皆さん。投資で得た財源は、町民だけではなく、広く国民に恩恵がある活動に充てています」

写真の町の整備から自然保護、オリンピック選手育成まで、株主は複数ある事業のなかから、投資先を選ぶ。結果、米や野菜など町の特産品が届くシステムは最近話題のふるさと納税に近いが、それだけにとどまらない。

株主は「東川町特別町民」として、町内の施設利用が優待される。

投資金額によっては、無料の宿泊も可能だ。すなわち、町を訪れたくなるしくみになっているのだ。

現在、株主は約四一〇〇人、総投資額は一億円を超えたそうだ。株主のための宿泊施設を見学したところ、設備があまりに良過ぎるため、株主への還元が行き過ぎてはいないかとの問いを松岡氏に投げかけた。

「町に来て、泊まって、その良さを体験してもらおう。それが口コミで伝わるのが、宣伝効果として大きいと思うんです。PR経費だと考えれば、さほど負担ではありません。結果が即、出なくとも、徐々に必ず広がっていくだろうと思えました」

写真関連のイベントに際しても、参加者の交通費、宿泊費は町が負担している。これらの施策によって、交流人口に加え住民の数も少しずつ増え続け、二〇一五年には目標の八〇〇〇人を超えたそうだ。

「東川の文化になじんだ人が、また人を呼ぶという流れが生まれています。小さい町ですから、お互いに顔が見える。何かあったときにはすぐ行きます、対応しますという姿勢で役場も動いています」

実際、移住した方に話を伺うと、役場の職員の熱意、移住やその後の暮らしへの支援、そして人が人を呼ぶ連鎖が確かに見えてきたのが面白い。

**水がおいしいから人がやさしいから**

たとえば、今年四月に東京から移住した弁護士森山大樹氏と妻の絵美氏。縁があつて東川町を訪れた際、豊かな自然と食事や水のうまさ魅せられたそうだ。



# 地域の底力——東川町

弁護士の森山大樹氏と、町の地域おこし協力隊の一員として働く絵美氏。「地域の皆さんも、なにが困ったら聞いて、と言ってくれる。東川町は行政だけではなく、地域ぐるみの共同体意識が強いですね」と大樹氏は話す。



そう、東川町にはひとつ、ほかにはない宝物がある。上水道の普及率はゼロ。というのも、環境省選定の「平成水の百選」にも選ばれた大雪山系の地下水を全戸が利用しているためだ。水源では毎分約四六〇〇リットルの水が湧き出ている。

「空気がきれい。景色は広大。しかも、こんなにおいしい水があるほどにあるなんて。直感的にここに住みたいと思いました」

初めての東川訪問を思い出し、絵美氏は笑顔を見せた。移住を決意してからは、役所の柔軟な対応に驚いたと大樹氏は話す。

「通常なら役所になにか相談しても、前払いがない、予算がないと門前払いをうけることも多い。ここ



ろが東川町は、何とかできるよう考えますとまずは受け止めてくれた。検討した上で、判断してくれたんです」

不妊治療の費用が全額免除になる支援にも、夫妻は注目した。

「結果的にはお世話にならずにすみました。心強い制度だなと思えました」という絵美氏は、移住後、役場との話し合いが爽り、「地域おこし協力隊」として町が取り組む

右／東川町のそこかしこで目に入る、旭岳の美しい姿。町の人にとっては日常の景色ながら、移住を考える人にとっては新たな生活へと背中を強く押す魅力のひとつになる。

下／東川町の人々の生活水である「大雪旭岳源水」はカルシウムをはじめミネラル分を豊富に含む、弱アルカリ性の中硬水。自由にくめるため、年間約五万人が町外からも訪れる。

ヘンプ（産業用大麻）注の栽培研究に携わっている。

大樹氏は東川町に事務所を構えた最初の弁護士となり、この夏からは町の依頼で、月一度の無料法律相談を開催。旭川空港が近いため、東京の仕事もそのまま継続できているそうだ。

人気の蒸しパン専門店「しのばん」を営む宇田川兼司、里香夫妻もまた、東京郊外からの移住者だ。北海道に移ったものの、なかなか定住の場所が見つからなかった。九年、役場の対応に背中を押され

宇田川兼司、里香夫妻による「しのばん」は、北海道産の小麦と天然酵母を使った蒸しパン専門店。素朴なおいしさが評判となり、田園風景のなかに佇む店には、近隣の旭川周辺はもちろん、広く道内からドライブがてらの客が訪れる。



たという。

「随分と親切にしてもらったのはポイントが高かったですね。小さい子供もいたのですが、幼稚園や保育園も、すぐ入れるから大丈夫ですよと言ってくれたんです」

そう話す里香氏は、旭川空港から車で一〇分という利便性も、最終的な決断に影響したという。

「空港に近いのは、私たちのような移住者にとって大事なこと。東京の実家でもなにかあっても、すぐに駆けつけられますから」

地元社会にすぐなじめるのだからかとの懸念には、兼司氏が笑ってみせた。

「うちの子が通う小学校は全体で四〇人ほどの小規模校で、運動会も学芸会も、すべて親が参加してつくり上げる。親も子供も、いつものまにか巻き込まれました。面倒くさいと思う人がいるかもしれませんが、私たちが楽しんでいきます」

夫妻が営む「しのばん」をはじめ、最近、道内の雑誌で東川町の

注 陶酔性の薬理成分が殆どない大麻。日本では昔から衣服や漁網などに用いられてきたが、戦後は大麻取締法によって栽培が厳しく制限。海外では産業用のほか、医療用などにヘンプの合法化が進んでいる。

各棟に薪ストーブが設けられた、ペンション「ニセウコロコロ」を営む正垣智弘、芳苗夫妻。この町で生まれた玲三郎くんほか、お子さんは4人。建物のまわりにはどんぐりの苗が植えられ、「10年後には森になる計画」と芳苗氏。



## 同じ思いを抱く人が いつしか集まるように

そんな町の環境を活かし、ペンション「ニセウコロコロ」(「ニセウ」

店が取り上げられることが多いとの話にも興味を促された。町を散策中、数多くのカフェや雑貨屋が、この町には点在しているのに心ひかれていたためだ。料理のおいしさにしても、小物のそろえにしても、顔や財布のひもが簡単に緩むほど、いずれもレベルが高い。



「ニセウコロコロ」を手がけた北の住まい設計社は、家具の設計、販売に加え、小学校跡の広い敷地を利用したカフェ、雑貨店なども人気を呼んでいる。

とはアイヌ語で「どんぐり」の意味)を営むのは正垣智弘氏、芳苗<sup>かえ</sup>氏だ。

芳苗氏にはもともと北海道への憧れがあったが、最初から東川町を目指したわけではなく、札幌周辺をはじめ時間をかけて探し歩いたとか。やがて人づてに東川を勧められ、旅行好きだった経験を活かし、宿泊施設を思い立った。

スタイリッシュなペンションは、家具にいたるまで東川周辺で人気の設計事務所が担った。朝食で用意されるパンや野菜、卵など食材の多くは東川産。さながら、町のアンテナショップのようだ。

「皆さんの意識が高く、自然にいいものがそろいます。お客様

のなかには、ここに滞在して、実際に移ってきた方も何組かいます。私たちが特に、移住を促進しているわけではなかったのですが」

芳苗氏の言葉を継ぐように、智弘氏が話す。

「ここでは、皆さんが町をよくしようという思いが伝わってくる。東京にいたときにはない感覚です。子供を連れてきたと、周辺の方々に歓迎されたのも嬉しかったですね。都会では子供の声が騒音になり得ますから」

最後は、町からの支援を受けて



木工クラフト作家の千葉章弘氏は、飛行機の操縦室と管制室とのやりとりを丁寧に描いた「空のみち」(月刊たくりさんのふしぎ2012年10月号) (福音館書店)で、児童書作家としてもデビュー。/千葉氏の作品の一部から。手前が「乳菌&へその緒入れ」。

数年前に独立した、木工クラフト作家の千葉章弘氏のケースをご紹介します。神奈川県での仕事を辞め、一七年前に旭川の技術専門学院の造形デザイン科に通い始めたことで、東川町での暮らしが始まりました。

「この町には、独立開業資金という『起業化支援制度』があるんです。設備投資の三分の一まで、上限一〇〇万円が起業の際に支援される。すごくありがたかったです」

町との関係をより深めたのは、千葉氏が考案した「乳菌&へその緒入れ」。抜けた歯を天井裏や縁の下に投げ込むのが難しい、現代の住宅事情をふまえて生まれた小箱だ。

そもそも東川町では、子供の誕生の際に手作りの椅子をプレゼントされる「君の椅子プロジェクト」





中学校卒業時に名前を刻んで生徒に贈与される椅子(左)と、東川小学校内に置かれている生後100日を記念して贈られる「君の椅子」(下手前)。ともに地元の工房で製作。子供たちを見守りたいという町の思いがこめられている。



## 子供たちの教育担う 人生のハブを目指して

が展開されていた。さらに、中学

三年間使用した木の椅子も卒業と同時に使ってきた子供にプレゼントされる。子供の成長を見守るそのコンセプトと、千葉氏の作品はつながる。町長のそんな判断により、椅子とともにひとりひとりの名前を刻んで「乳歯&へその緒入れ」が贈られることとなった。

「自分の住む町で生まれた子、すべての名前に目を通せるのは、なかなかできない体験。うれしく思っています。男の子だったらちよつと力強い木目にしたり、女の子だったらやさしい感じの木目を選んだら、町の規模がさほど大きくないから、思いをこめつつ作業できるんです」

今回、お会いした方々は、三〇

〜四〇代。自然に恵まれた東川町での暮らしを楽しむだけでなく、交流人口や移住者を呼び込む橋渡し役になったり、町民の暮らしに貢献したりと、図らずも相互作用が生まれているのが興味深い。町長の松岡氏はさらなる未来を考えていた。

「地方創生論として高齢者は田舎に住んだらいいという考えがありますが、僕は逆だと思っんです。若い人たちの子育てや教育は農村でやり、高齢者は病院が近く買物に便利な都市に住む。農村で教育を受けて、都市に向かう。そんな循環のなかで、人生のハブ的な機能を東川町に持たせることが、活性化になるのではないかと思います」

移住や交流の活性化に関しては、海外にも目が向けられており、今年秋には、国内初の町立日本語学校が開校となる。八〇〇〇人規模の町で、と疑問を抱かれるかもしれないが、実は中国、台湾、ベト

ナム、ウズベキスタンなど、多様な国々からの留学生を長年にわたって受け入れてきた実績がある。

「日本語を学ぶなかで、未来を一緒に考えていこうと。東川で過ごした生徒が将来、日本と自分の国を結びつけてくれるかもしれない。東川の特産品を輸入するビジネスが生まれることだってあります」

加えて、将来的には介護福祉士や家具のデザイナー育成のための講座を設けたいと話す松岡氏のビジョンは広がる。

「東川町で学んで、都会や海外にまた戻る。そのしくみが定着すれば、必ず数年は何百人かの若い人たちがここに滞在する。なかには定住する人も出てくるでしょう。そういう循環が起きてくれれば、ありがたいなと考えています」

実現に向けては、様々なハードルが横たわるだろうが、松岡氏は大らかな笑顔を見せた。

「町の紹介の際、いつもする自慢話があるんです。東川には上水道がない、鉄道がない、国道がない。でも、本州には絶対がない、大きな夢のある道がある。『北海道です』その言葉に北海道の、そして

一八九四年に原野を開拓して始まった町の歴史を思い出す。その後、道なき道に「写真の町」の看板を掲げて文化を育み、人の心が耕されてきた。今、町長や役場の職員、そして移住者を含む住民たちが蒔いている新たな種が、未来にもたらす実りが楽しみでならない。

二〇一四年に完成した東川小学校は、北海道出身で世界的に活躍する彫刻家・安田侃氏のアートが学内外に飾られているほか、自然光がたっぷりと入る開放的かつ先進的な構造。子供をこの学校に通わせたいと、移住を考える人も増えているという。

